

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32206
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2016
 課題番号：24593401
 研究課題名(和文) 保育園との連携・協同による5～6歳児にむけた体の構造と機能を学ぶ健康教育の構築

 研究課題名(英文) Development of health education program in collaboration with nursery schools wherein children at the appropriate age of 5-6 years learn about the human body (structure and function).

 研究代表者
 世良 喜子 (SERA, yoshiko)

 国際医療福祉大学・保健医療学部・教授

 研究者番号：50461736
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、体について学ぶのに適した年齢である5-6歳児を対象に、保育園と連携・共同して体(構造と機能)を学ぶ健康教育プログラムの構築を目的としている。健康教育プログラムを開発するための基礎資料を得るために、保育園の保育士、保護者を対象に子どもに体(構造と機能)について教えることに対する認識やかかわりについて調査した。さらに保育所における体のしくみの健康教育(実施者：看護系大生、対象：5-6歳児クラスの保育園児)を実施し、子どもの反応や保育士の反応や変化を確認し、その効果を検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop a health education program in collaboration with nursery schools wherein children at the appropriate age of 5-6 years learn about the human body (structure and function). A survey was conducted with the guardians and nursery school teachers about the perception and engagement regarding teaching the children about the body (structure and function) to obtain basic data for developing the health education program. Moreover, health education regarding the mechanism of the human body was conducted (instructors: nursing undergraduate students, subjects: children aged 5-6 years) in the nursery schools, and the children's and teachers' responses/changes were observed. We examined the effect.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：ヘルスリテラシー 健康教育 からだのしくみ 5-6歳児 保育園 連携

1. 研究開始当初の背景

生涯にわたる健康の保持、増進のためには、子どもの時から健康的な生活行動を獲得することや、健康の主体者としての保健行動がとれるようになる基盤を形成することが重要である。日本学術会議健康・生活科学委員会では、子どものヘルスプロモーションを推進するための方策として「子どもが自らの健康をコントロールする個人的スキルや能力の強化」を挙げている。

子どもに対してさまざまな健康教育がおこなわれている。しかし個別の健康課題に対しては知識・対処行動を獲得できるが、それが新たな健康課題に向けての般化効果が少ないこと、さらに科学的根拠にもとづく健康行動の選択につながらないことや健康の価値の向上をもたらしていないことが指摘されている。

人々が主体的に自らの健康のために、適切な健康情報を選択し、健康的な行動をとっていくための基盤として、体(構造や機能)に関する知識が必要である。

子どもにおいても、体について学ぶことにより、体への関心が深まり、命の大切さを理解し、健康の価値にきづくことや体のしくみに基づいた健康的な生活や行動をとることができることが報告されている(数見、2003;伊藤他、1996)。学習指導要領では、人の体のつくりや発育・発達については、小学校4年生からの学習に挙げられている。しかし体についての学習を始めるのは、体の偏見が少なく、自分自身の体への興味・関心が高まり、素直にその関心を示す就学前の5~6歳児が適切であることが報告されている(菱沼、2006)。

平成20年に改定された保育所保育指針では、健康な生活の習慣の形成だけでなく、子どもが自らの体や健康に関心をもち、心身の機能を高めていくことの大切さが新たに記されている。5~6歳児が、体(構造と機能)を学ぶことにより、体を大切に、健康行動につながることを報告されている(石本、2008)。

子どもの健康に関して利用する社会資源として、保育園児の保護者の80%が保育園をあげている。さらに保育園が健康教育の場として機能することを望んでいることが報告されている(平林、2010)。

5~6歳児にむけた体の構造と機能を学ぶ健康教育については、菱沼らの報告はあるが、保育園における長期間にわたる系統的な健康教育の実践報告はみあたらない。

そこで子どもの健康に関する社会資源および健康教育を期待されている保育園において、5~6歳児を対象にした体のしくみを学ぶ健康教育を検討する必要があると考えた。

<引用文献>

数見隆生(2003):生きる力をはぐくむ保健の授業とからだの学習,農文協

伊藤由美子他(1996):からだってすごいね,農文協

菱沼典子他(2006):5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製-市民主導の健康創りを目指した研究過程,聖路加看護大学紀要,32,51~58

石本亜希子他(2008):子どものために開発したからだの教材を用いた学習展開の検討,聖路加看護学学会,12(2),65-72

平林優子他(2010):保育園児の家族が子どもの健康に関して利用する社会資源と要望,聖路加看護大学紀要,(36),17~24

2. 研究の目的

本研究は、体について学ぶのに適した年齢である5~6歳児を対象に、保育園と連携した体の構造と機能を学ぶ健康教育プログラムの構築を目的とした。

以下のことを目標とした。

(1)5~6歳児が体の構造や機能について学ぶことについて保護者と保育士の認識や現状を明らかにする。

(2)5~6歳児にむけた体のしくみ(構造と機能)の健康教育プログラムを作成し、保育園と協同して、実践する。

健康教育プログラムの効果を検討する。

3. 研究方法

1)健康教育プログラム構築のための基礎資料

(1)文献および就学前の子どもを対象にからだのしくみを教える先駆的取り組みに参加、情報収集を行った。

(2)保護者や保育士の5~6歳児が体のしくみについて学ぶことに対する認識やかかわりのインタビュー

保育園に通園する5~6歳児をもつ保護者を対象に半構成的面接および保育士にグループインタビューを実施した。インタビューの内容はからだのしくみを教えることに対する認識、体について教えている内容や方法、体について学ぶ健康教育への要望等であった。

(3)ヘルスリテラシー育成に向けた保護者と保育士の認識とかかわりのインタビュー

保育園の保育士および看護師、保護者を対象に半構成的面接を実施した。面接の内容は、ヘルスリテラシー育成についての認識とかかわり、ヘルスリテラシーの基盤として体の知識を教えることの必要性の認識であった。

2)からだのしくみの健康教育プログラムの作成と保育園での実践・効果

(1)保育園に対して、「からだのしくみ」の健康教育の必要性と効果について説明を行い、からだのしくみについて教えることへの理解の周知を図った。

(2)1)で得た情報や2)での調査で得たことを基に、からだのしくみの健康教育プログラムと教材を作成した。それを保育園に提示し、保育士からの情報や意見をもとに洗練した。

(3)ヘルスリテラシーの育成の視点から3)の調査で得たことを基にプログラムを見直した。

(4)保育園での実践の効果

保育園での実践による子どもと保育士の反応と変化について聞き取り調査を行った。

(5)看護学生の反応と変化

健康教育を実施した後で記述した「健康教育の振り返り」のレポートの記述内容から学生の学びや変化を明らかにした。

3)日本小児看護学会においてテーマセッションにおける情報交換・意見収集

研究の過程において倫理的配慮に心がけるとともに、研究者の所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

4.研究成果

1)保護者や保育士の5~6歳児が体のしくみについて学ぶことに対する認識やかわり

(1)保護者・保育士がとらえた子どものからだに対する興味・関心

保育園の年長(5~6歳)くらいになるとからだに関する興味がよりたかまっていると認識していた。走ると心臓の鼓動が速くなることや、けがをして血がでるなど、知覚したり、実際に見えることから、子どもがからだに関して興味や疑問を感じていることをとらえていた。さらに保育士は、4~5歳児は体の内部のしくみもわかるようになるが、本当にちゃんと理解できるようになるのは、5歳ぐらいと捉えていた。また5歳ぐらいになると、日常生活行動の意味とからだのしくみをつながられるようになるのとみていた。

保育士は、4~5歳児は体の内部のしくみもわかるようになるが、本当にちゃんと理解できるようになるのは、5歳ぐらいと捉えていた。また5歳ぐらいになると、日常生活行動の意味とからだのしくみをつながられるようになるのとみていた。からだへの興味・関心は個人差があると捉えていた。見えたり、感じることは関心をもつが、自分のからだの内部に目をむけることは子どもにとって難しいと考えていた。幼児は興味・関心があると、理解しようとするが、関心がないと学ばないし、理解できない。教えるときは、子どもが興味・関心をもつようなきっかけが必要であると考えていた。一部の子どもが関心をもつと、連鎖して他の子どもに広がっていくと捉えていた

(2)子どもにからだの知識を教えること

からだの知識を教えることは程度の差はあるが、ほとんどの保護者が肯定していた。体について教えることを知識の教育としてとらえ早期に知識を教えなくてもよいと考える保護者もいた。保育士は、5~6歳になると、自分のからだの状態を伝えることができるようになる。したがってからだのしくみを

教えるのに適していると捉えていた。しかし興味・関心がないと学ばないという幼児の学びの特徴から、生活の中できっかけとなるようなことがあった時に教えることがよいと考えていた。

(3)からだのしくみと機能の健康教育

体の構造やしくみは、保護者や保育士自身も十分に分かっていないことがあり、子どもに教えることが難しいと感じていた。

子どもがからだについて生活行動とむすびつけて興味関心を抱き、からだの仕組みを理解していくと考え、一緒に生活する保護者や保育士が、子どもと一緒に学ぶことや子どもが学んだ内容を知りたいことを望んでいた。

生殖器に関することは、子どもの興味関心が強いことや、第2次性徴が早期化していることから、小学校入学以前から必要なのではないかと考えていた。専門家による性に関する健康教育の実施を希望していた。

2)保護者や保育士の子どものヘルスリテラシー育成について

(1)子どもの健康情報の獲得

健康の情報の獲得については、<健康的な行動を行うこと>、子どもが健康的な生活を体験できるように周囲の大人が<健康的な生活を整える>ことで、子どもが健康を生成する情報を得ることができると考えていた。また幼少時から子ども自身や周囲の子どもや大人が病気になったり、けがをする<病気やけがの経験から知る>を通して、病気やけがに関する知識や情報を得て、その対処方法を知っていくと捉えていた。

(2)子どもの健康情報の理解

4歳になると理解力が発達すると捉え、子ども自身がその情報を理解して行動できるように<機会をとらえて行動の意味を伝える>ようにかかわっていた。歯を磨かないと虫歯になるということを「親の虫歯」をみせたり、教材や絵本等を用いて<子どもが具体的にわかる>ようにしていた。また「お風呂から出て、体を冷やした後、風邪をひいたでしょ。だから早く服をきなさい。」等、<過去の体験と結びつける>ことで、伝えていた。5~6歳になると教えたことから自ら<自分で考えて行動する>ようになるのと捉えていた。

(3)ヘルスリテラシーの基盤として体の知識を教えること

体のしくみを知ることは、子どもが健康につながる行動の意味が分かることに役に立つと考えていた。しかし子どもの健康行動を形成するためのかわりにおいて「おなか痛くなるよ」等は言うが、意図的に体のしくみとつなげてはなかった。

3)プログラムの実施と効果

2013年度より2016年度まで、看護系大学生5~6名で、10保育園で5~6歳児クラスの園児を対象に各園2~3回/年実施した。

先駆的活動で行われているプログラムを参考に、循環器系、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、筋骨格系、神経系のうち、一つの系統を取り上げて企画・約20分程度で実施した。

取り上げた系統の体のしくみとそれに関連した健康行動をつたえる健康教育の企画を看護学生が立案し、その企画案を保育園に提示した。対象となる子どもの情報に関する情報(子どもたちの体に関する興味や理解の程度、健康診断や運動会などの体のしくみへの興味のきっかけとなる出来事、子どもたちの健康行動や健康状態等)を保育士から収集した。また転んで血が出た時の対処となぜそのようにするのかの根拠など子どもに伝えてほしい体のしくみや健康行動について保育士の要望を聞いた。それらをもとに子どもの興味・関心、日常生活と関連して体のしくみを伝えられるプログラムと、教材を作成した。さらに作成した具体的なプログラムや教材について、保育士から意見を基にさらに洗練させた。また子どもへのかかわり方等のアドバイスをもらうなど、保育士と協働した。

健康教育実施時には、対象となる子どもを担当する保育士も一緒に参加した。そして健康教育終了後、子どもの反応からわかりにくかったと思われたことなどを、保育士が子どもがわかる言葉や日常生活とむすびつけて説明をすることで、補った。

(1) 子どもの反応や変化

子どもたちは興味・関心をもって聴いている。特に今まで知らなかったからだのしくみについては、静かに聞き入っており、集中している様子がみられた。

からだのしくみを理解することにより、例えば友達をたたいていた子どもが、心臓の役割が重要であると認識し、叩かなくなったなど、子どもの行動の変化がみられた。また健康行動の意味が体のしくみとつなげてわかり納得すると、子どもが自ら健康行動をとるようになった。家庭でもからだの話をもとに母親や家族に説明し、自分から健康的な行動をとるようになった子どもがみられた。

子どもが体に関心をもつとともに、たとえば泌尿器系のしくみを学ぶことにより、おしっこを挿入することをしなくなるなど体も大切なものとしてとらえるようになった。

子ども同士でも体に関する会話が多くなったり、からだの絵本を読むことや保育士に体について聞いてくることが増えた。

(2) 保育士の反応や変化

子どもは就学前であっても、体について知識を獲得することで、自ら主体的に健康行動をとるようになることを認識し、体のしくみとつなげて子どもに健康行動を教えることが増えた。また保育士自身も体のしくみの理解が深まり、日常保育の中で子どもにからだについて話したり、説明する機会が増えた。

(3) 看護学生の反応

学生は【子どもの発達にあわせた工夫】をし、健康教育を企画・実施することで、【子

どもの健康教育の難しさ】を感じつつも、【子どもの理解の深まり】を体得していた。そして【子どものへの効果を確認する視点】をもっていた。この体験を【今度の実践に活用】したいと感じ、子どもへの【学生の思い・願い】をもっていた。

上記のことから、体の構造と機能を学ぶ健康教育プログラムを実施することにより、子ども、保育士および看護学生に効果が認められた。

4) 今後の課題

日常生活の中で具体的な体験や事柄から学ぶという幼児の特性からも、日常的に子どもに接する大人が、からだのしくみを理解して、子どもに教えることが必要である。そのためにも、保育士や保護者が体のしくみを学びそれを子どもに伝えることができるように支援していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計9件)

- ・稲葉史子, 世良喜子: 子どものヘルスリテラシー育成を目指した看護学生による健康教育, 第26回日本健康教育学会学術大会, 2017年6月24日, 早稲田大学早稲田キャンパ(東京)
- ・Sera Y, Suzuki E, Tkayam Y, Takano M: Public Perception of and Engagement in Health Literacy among Parents and Preschool Teachers in Japan- Towards Developing Early Childhood Health Literacy and Foundations for Health Education, The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2016年3月9日, Hong Kong
- ・世良喜子: 幼児のヘルスリテラシー育成にむけた保育士の認識と実践, 第35回日本看護科学学会学術集会, JMSアステールプラザ(広島県広島市), 2015年12月5日,
- ・世良喜子, 高瀬佳苗, 小西美樹, 大野温美: 小児看護学実習における未就学児を対象に企画・実施した「体のしくみの健康教育」での学生の学び, 第34回日本看護科学学会学術集会, 2014年11月29日, 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
- ・世良喜子: 幼児のヘルスリテラシー育成にむけた保護者の認識とかかわり, 第5回国際医療福祉大学学会学術集会, 2015年8月30

日,国際医療福祉大学大田原キャンパス(栃木県大田原市)

- ・ 世良喜子, 高瀬佳苗, 大野温美: 保育士の5~6歳児のヘルスリテラシー育成にむけた健康教育の認識とかかわり,第4回国際医療福祉大学学会学術集会,2014年8月30日,国際医療福祉大学大田原キャンパス(栃木県大田原市)
- ・ 世良喜子: 幼児にからだのしくみを教えることに対する保育士の認識とかかわり,第24回日本小児看護学会学術集会,2014年7月24日,タワーホール船堀(東京都江戸川区)
- ・ 世良喜子, 高瀬佳苗: 小児看護学実習における「からだのしくみの健康教育」での学生の学び 循環器系とテーマにした学生の学び,第15回日本看護医療学会学術集会,2013年9月7日,名古屋大学鶴舞キャンパス,(愛知県名古屋市)
- ・ 世良喜子, 高瀬佳苗: 5~6歳児が体の機能と構造について学ぶことの保護者の認識とかかわり,第3回国際医療福祉大学学会学術集会,2013年8月31日,国際医療福祉大学大田原キャンパス(栃木県大田原市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

テーマセッション企画・開催:看護学生が企画実施する5~6歳児向けの健康教育「体のしくみ(構造と機能)」-保育所実習における小児看護実践能力の育成-Part2 日本小児看護学会 第26回学術集会,2016年7月23日,別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ(大分県別府市)

テーマセッション企画・開催:看護学生が企画実施する5~6歳児向けの健康教育「体のしくみ(構造と機能)」-保育所実習における小児看護実践能力の育成日本小児看護学会 第25回学術集会,2015年7月25日,東京ベイ幕張ホール(千葉県千葉市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

世良 喜子(SERA, Yoshiko)
国際医療福祉大学・保健医療学部・教授
研究者番号:50461736

(2) 研究分担者

鈴木 英子(SUZUKI Eiko)
国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・教授
研究者番号:20299879

(3) 連携研究者

高瀬佳苗(TAKASE Kanae)
福島県立医科大学・看護学部・教授
研究者番号:20455009
稲葉史子(INABA Fumiko)
国際医療福祉大学・保健医療学部・助手
研究者番号:20756829

(4) 研究協力者

瀬戸山陽子(SETOYAMA Yoko)
小西美樹(KONISI Miki)
大野温美(OONO Atumi)
魚崎浩子(UOZAKI Hiroko)